

# 大鏡用語の再検討

その一

北西鶴太郎

これからは折にふれて、大鏡の語彙方面、時には事彙にも亘り、私かに疑問とするところをとりあげて先学の所見を検討し、かねて愚見を陳べ、大方の示教を仰ぎたいと思ふ。

## 一、懈怠者

まづ一例として、太政大臣実頼の伝中、その孫佐理（日本三蹟の一人）の人物を評する条をとりあげてみよう。流布本は、左の如く書いてゐる。

御心ばへぞ懈怠はすこし如泥人とも聞えつべくおはせし。

この場合の主格は、「御心ばへぞ」であり、文脈上、「懈怠」なり、「如泥人」なりは、相並んでその心ばへの内容を解説した言葉であらうと考へられるのに、卒然「懈怠は」といはれてみると、いささか面喰はざるを得ない。

この書における近世第一の註書大石千引の大鏡短観抄を見るとその本文は、むしろここに掲げた流布本の通りであつて、「けたい」、「如泥人」については、可なり詳しい解説を下してゐるが文脈、もしくは「は」に関しては、何等触れるところがない。

鈴木弘恭の大鏡註釈なども、同様不問に附してゐるばかりでな

く、「ここは故中関白殿（藤原實隆）の御心ばへを、記者より評じていへるなり」と、佐理に色紙形を書かせた道隆を、佐理と取りちがへてゐるくらゐであるから論外として、落合直文、小中村義象の大鏡詳解には、

懈怠はすこしは、懈怠なるところは、すこし如泥ともいふべしといふ意。

と註してゐる。

なにか、わかつたやうな、わからないやうな形式的な換言法を用ゐて、あやふやなことを言つてゐる。しかし如泥人を解して、

俗にデレツクの意。

とやつつけてゐるのは、小気味がよい。

後年の池辺（小中村）義象単独の（新註）大鏡は、本文を、「御心ばへぞ、懈怠し、すこしは如泥人とも聞えつべくおはせし」と直し、その訳文には、

佐理卿の有様は、物ぐさで、なまけやすく、如泥人とも、些か申されるやうであつた。

と書いてゐる。

芳賀矢一先生の大鏡も、本文は、「御心ばへぞ懈怠し、すこしは云々」で、「御性質はのんきな方で、少し如泥人といったやう

な方でした。」

と訳してをられる。

関根正直先生の大鏡新註には、本文を、

御心ばへぞ、懈怠しすごし、如泥人とも聞えつべくぞおはせし。

と改められ、頭註に

怠慢し過ぐすこと、諸本、懈怠はすこしとあれど非なり。  
今屋代本に従つて改めつ。

改められたことについては、後刻論及することとし、「とあれど非なり」、「そんな語法があるもんか、くどいふまでもない。わかりきつてゐる。」とでもおつしやるかのやうに、無造作に断定せられた点には贅意を表せざるを得ない。

佐藤球の大鏡詳解の本文は、「すこし」の下に「は」のある以外は、流布本のままで、解釈には

佐理卿は、心様のものぐさなところは、すこし、ぐづとも申さるべき人なりとなり。

といつてゐるが、「懈怠は」と「如泥人」との語法的乃至意義的關係が、なほ明確にされてゐない。

橋純一氏の大鏡通釈および大鏡新講は、史籍集覽本、大鏡新註等に依拠して、本文を

御心ばへぞ、懈怠しすごし、如泥人とも聞えつべくおはせし。

とし、「御氣性がものぐさすぎて、如泥人(深酔者ぐづぐづしてし)と申していい程でいらつしやいました」

と解された。

本文の適否はともかく、これで一往、「御心ばへぞ、懈怠は云々」の如き流布本式の無理な語法から解放せられて、文脈は通じることになった。しかしこれで疑問は解決点に到達したか。否と謂ひたい。

引用が少しく煩瑣にすぎたので、本文を整理して見ると、

- 一、御心ばへぞ懈怠はすこし(流布本・短観抄・鈴木の註釋・落合・小中村の詳解)
- 二、御心ばへぞ懈怠し、すこしは(池邊新註・芳賀口譯大鏡)
- 三、御心ばへぞ懈怠はすこしは(佐藤の詳解)
- 四、御心ばへぞ懈怠しすごし(新註・通釋・新講)

の四通りになる。

そこでいよいよ本文の再吟味が迫られることになった。

まづ古本系の千葉本は、「懈怠—怠—怠すこしハ」となつてゐて、これは、二つの理由から、まさしく「懈怠者」とよむべきである。即ち、

- (1) 字体から判断して、「怠」を「志」もしくは「志」とよむことは無理である。

- (2) 「懈怠—怠—怠者」と字間に線を引いてその複合名詞なることを明らかにしてゐるから、「懈怠は」、もしくは、「懈怠し」とよむことは出来ない。

その傍証となるものは、萩野本で、「懈怠者にて」と助詞「に」を添へて、「懈怠者」が名詞であることを明らかにしてゐる。

谷森本二本も同様であり、旧帝室博物館本には「懈怠者ケダイシヤと片仮名の字訓まで施してある。鳥丸本の如きもすなほにみれば「懈怠者すこしハ」と読むべき字体をなしてゐる。

なほ内部的徴証として挙ぐべきものは、大鏡作者の「〇〇者」

といふ語を愛用してゐることである。尊者（基経伝）、智者（実頼伝）、権者（道長伝）などは、普通誰にも使はれる語彙であるから論外におくとしても、有心者（頼忠伝）、風流者（伊尹伝）、道心者（伊尹伝）、持経者（実頼伝）、説法者（古物語）、文者（道長伝）等々ちよつと探しても面白いくらい出てくる。

従つてここに「懈怠者」といふ用語が現はれて来ても、大鏡として見れば、また例のかと感じるぐらゐるが関の山で、何等奇異の感を発動させるものではない。

以上の考察によつて、ここは、すなほに読んで、「懈怠者」となすべきものと論断する。

さて次に、流布本の「懈怠はすこしで」であるが、この奇異な書き方をした原因はどこに伏在するかといへば、まづ「者」の草書「者」<sup>シヤ</sup>を常に読まれるやうに「は」と読み、それを表記する文字に「者」の草字を用ゐないで、「盤」の草字を用ゐたところにあると考へられる。これはむろん伴信友校本のやうに「者」と訂正すべきものであらう。

一体、「懈怠」は、

一日ばかりの精進の懈怠（枕、春曙抄 二十一一段）

懈怠なく催しさぶらはせ侍るを（源、浮舟）

などのやうな名詞的用法の外に、

今朝も（匂宮が）いと懈怠して（中宮方へ）参らせ給へるを（源、東屋）

行ひも懈怠して（源、柏木）

念仏も懈怠するやうに（源、若葉上）

年頃の御念誦も懈怠して（栄華、浦々の別れ）

等動詞的用法も盛に用ゐられてゐるから、大鏡のこの場合も、「懈怠し」と読むことだけは咎むべきではなからうし、また平松本、桂宮本、八坂本等々では、字体が「志」とも「者」とも訓み得る書きざまをしてゐるから、この点からも「懈怠し」と読むことは許されよう。ただし、前記諸例のやうに、匂宮が懈怠したり、行ひや、念仏や、御念誦を懈怠するなら、何のこたはりもなく、用語が妥当しようが、「御心ばへぞ懈怠し」と言はれては、何となく耳ざはりな、奇をてらふ表現で、大鏡の作者らしくもない気がする。

さらに「懈怠しすこし」と読む諸説について論ずれば、千葉本、烏丸本、桂宮本、近衛本、尾張本その他の古写本のやうに

懈怠しすこしは、

の「は」をどう取扱ふのであらうか。いかに武断的な強引な態度に出ても

懈怠しすこしは

などいふやうな暴力的な読み方は出来まい。

以上のやうな理由によつて、ここは、「懈怠者」と名詞によむことを提案する。

またさう読むことによつて、談話調による世継の翁の語気や、ポーズのおき方や、表情や心理の動きまでも酌みとれると思ふのである。即ち、

佐理卿の御気性は（ト力を入れて）物臭（ト言つたのでは、どうもまだ言ひつくせない、的確をかく気持も手伝わため、休止符をおき、さて、如泥人ト、ズバリ佐理の人物を的確に捉へた、また聴衆の耳にも刺戟的にひびく言葉が

意識の表に浮んだものの、それでは前太宰大貳に対していささか無様だとうちよせられ、やや、遠慮がちに）まあ少しは、愚図郎兵衛とでも申されさうで入らつしやいました。

卑俗な訳で恐縮ではあるが、意味はだいたいこんなことであらう。萩野本や谷森本一本のやうに、「懈怠者にて」と説明的に中止するよりは、無言の休止の方が面白い。

要するに、この文脈は、「御心ばへ」を、「懈怠者」と「如泥人」とで内容的に開示したもので、「如泥人」は、「懈怠者」の語義の不備を補ひ、性格をカバーする評語として選出されたもので、両者は、形式上対語をなしてゐる。たつた二語で、天才的な芸術家にありがちな世俗の常規に律せられぬ性格を評し得て適切である。

## 二、穴を掘つて物を言ひ入れる

右のやうな調子で、立ちかへり序文からここかしこ見廻つて行かう。

まづ雲林院菩提講問題であるが、これは、今紙面の不足で要を尽し得ないから、後日を期することとし、

昔の人は、物いはまほしくなれば、穴をほりてはいひ入れ侍りけめ、

といふのを採りあげよう。

何か故事出典がありさうで、年来氣にかけてゐるが、今に見當らない。

ただ井上義昌氏編、英語故事伝説辞典の中に、次のやうな話が載せられてゐるのは、大きなよろこびである。

## Midas—King Midas (máidas)

(ギリシヤ神話)

ギリシヤの酒の神 Dionysus (Bachus) の保護者であつた教師であつた Silenus が、或時酩酊して歩き廻つてゐると、そこへ田舎者達がやつて来て、彼を Midas 王の所へ連れて行つた。Midas 王は、そこで Silenus を歓待して十一日目に無事彼を酒神の所へかえた。Dionysus は、その謝礼として与うべきものを Midas に選ばせた所、王は自分の触れるものが皆黄金に変化することを願つた。その願は聴かれ、手に触れる凡てのものは黄金となる力を得た。これを golden-touch という。然るに食物を手につれば、黄金となり、娘を抱かんとすれば、黄金に化するに及び、全く困り果て Midas 王は黄金色に輝く手をさして、Dionysus 神に更に救済を乞うた。慈悲深き Dionysus 神は、これをきこしめし、Midas 王を Pactolus 河中に沐浴せしめて、彼の誤つた考と罰とを洗い流させた。その時から造金力はこの河にうつり、Pactolus 河には砂金が流れてゐるといわれる。

又 Midas 王は、或時 Apollo と Pan との音楽の競技の優劣を審判する様命ぜられたが、彼は勝を Pan に与えたので、Apollo は輕蔑の意味で彼に驢馬の耳 (ass's ears) を与えた。ここに於て Midas は「フリシヤ帽 (Phrygian-cap) を被つてその耳を隠したという。然るに王の理髮師が之を発見したが、他に口外したくもこれをする事が出来ないので、地面に穴を掘り "Midas has ass's ears"」と

イダス王の耳は驢馬の耳」とささやいて氣を安めたという。

なるほど有名な話で、このごろの子供達なら誰でも知つてゐるかも知れない。手近なところでは、野上弥生子姉訳ギリシヤ・ロマ神話（岩波文庫）の中にも、ミダス王の話として詳しく出てゐる。筆者も、昔同書の旧著「伝説の時代」で読んだはずであるが、久しく記憶から喪失し、まして大鏡のここを聯想することなどはまるでなかつたのである。

しかし、大鏡の作者の頭の中に、このギリシヤ神話が思ひ浮んだのだらうなど、憶はうとするほど大胆ではない、たとひ説話の世界拡布性を考慮に入れるにしても。

そこで、印度でも中国でもいい、何かこれに類似の話が、文献か伝承の中から出てくれればと、幼稚な期待をかけてゐるのである。

### 三、四十たりの子

子を十人までうみて、これは四十たりの子にて、いとど五月にさへむまれてむつかしきなり。

この「四十たりの子」がまた疑問である。

短観抄に「四十足の子なり。今も俗に嫌ふ四十二のふたつ子なり。これは、父の年の四十歳と、子の二歳と合すれば四二となる故に忌<sup>ふ</sup>なるべし」（舊帝國圖書館本による）といつてゐる外は、落合小中村の詳解を始め、註釈、佐藤の詳解、口訳（新註）、新註、通釈、新講等悉く「これはし十人の子」と読んで、「し」を強意の助詞（問投助詞）の意に解してゐる。ところが皮肉にも三条家本断簡、桂宮本、水府本、南葵文庫本、近衛本、三手文庫本、平松本、京大本

等々を始め、管見に及んだ古写本の殆どすべて、さらに東松本、萩野本から、流布板本、伴信友の校本に至るまで、みな

これは四十たりの子

と書いてゐる。この根強い伝統の力を無視し黙殺し去つて、

これはし十人の子

と改作することは、あまりにも武断に過ぎはしないか。果然、最近刊行せられた、松村博司氏の「大鏡の新しい解釈」（この書には、まことに良心的な、極めて慎重な、深い考察が各所に加へられてゐるが）には、左の如き説が発表せられた。

氏は、まづ短観抄の説を挙げて、

この説は俗説が二つ重なつて、下の「いとど」が生きるように思われる。普通は、「これはし十人の子にて」とよみ、「し」は強意の助詞、十人目の子ということ強めたい方と見てゐる。「こればし」とよんで、「ばし」を強意の接尾語と見ることもできそうであるが、この語が文学に見えるのはやや時代が下つて、「相構へて（注意シテ）よくよくいたはり奉れ。御心にばしたるがふな」（平家物語卷二新大納言被流の条）、「某を恨みとばし思うてくれるな」（狂言鞆<sup>うづ</sup>猿）等その他古今著聞集などの近古文に多く見られるが、それらは下に問い掛けや禁止の語句を伴つてゐる点に小異があるので、通説に従い「はし」とよむのがよい。ただし十人の子が十人目の子の意になり得るか否かにも疑問がある。

旧説に泥まされず、また容易に論断を下されない態度は、はなはだおくゆかしい。

「ばし」については、山田孝雄博士の平家物語の語法（文部省）に、

「バシ」は、平安朝の末にあらはれたるものにして、そのはじめは、「ヲバ」の意の「バ」の下に、「シ」の附属せるものなりしが、いつしか転じて、副助詞の性質を有するに至れり。されど、この語は、従来、研究せられたることなきが故に、その性質不明に属すと目せられたるが如し。次には、これが副助詞に属すべき性質のものなることを、この平家物語の例にて説くべし。

「バシ」の成立が、「ヲバシ」の義を基とするが故に、自ら主格に附属することなくて、「ヲ」格補語に附属するもの最も多し。これなほその本性の存留するが故なるべし。

「ヲ」格補語に附属せるものの例、この時には、「ヲ」助詞のあらはれざるを注目せよ。

暁ヨリ不見ツレハ、身ハシ投ニ出ニケルヤラムトサヘ覚テ

（六末二十九、ウ）  
三十、オ

人に頸ハシ切ラレウトテ不覚ノ人哉ト云ケレハ

（二末、三十七、オ）

自今以後、若党共、上総殿ニ无礼ハシ仕ルナトソ悦ケル

（五本、四、ウ）

相構テサヤウ行ハシセサセ給（候）ナ。關東安穩公家損亡ト  
祈ラセ給候へ

（六末、九十一、ウ）

同クハ、イサ都へ、京ツトハシモ取セムト宣ヘバ

（一本、五十七、ウ）

主上ハ、御涙ノ龍顔ニ流ヲ袂ニ押拭ワセ給ヒ、サラヌ様ニ  
モテナサセ給テ「ヤ、仲国、思懸ヌ事ナレトモ、若小督カ  
ユクヘハシヤ知タルトソ仰ケル（三本、十五、ウ）  
次に「ニバシ」といふ例あり。

サテモ我主ノ御行エヲ尋レハ罪深キ御事ニテ生ナカラ餓鬼  
道ニハシ落給タルヤラム（二本、五十四、オ）

この例によりて、「バシ」は、「ヲバ」の原義より離れて、  
副助詞、又は、係助詞の性質を有するに至れるを見る。  
かくて、この例にては、副助詞とも係助詞ともいふべくして、  
一方には定めかねる例ともいふべし。次には「バシニ」とい  
へる例あり。

佐々木思ケルハ、ニクヒ梶原カ言カナ、何ナル子細ニテモ  
アレ、ソレニ縋ヘカラス、子息兄弟所従眷属ハシニ物ヲ云  
様ニ、放逸ナル者ノ言ヤウカナ、シヤ喉フエ射貫テ、只一  
矢ニ射落サハヤトソ思ケル。（五本、八、ウ）

この例に至りては、係助詞にあらずして、副助詞なるを証す  
るに足れり。係助詞は、格助詞の下につくを常として、格助  
詞の上にあること決してなきを原則とすればなり。

次には、連用格に附属せるものあり。これ副助詞の用法にも  
とることなし。

只御方ノ勢ノ候ワヌ時ニ憶シテハシソ被思食候ラム

（三本、二十九、オ）

以上の如くなれば、この延慶本の例のみにても、「バシ」の  
副助詞たることを証するを得たり。

なほ同博士の日本文法学概論には、助詞にも、熟語に準じて論

すべきものがある。それは、単に助詞が数多相重なつてゐるのをいふのではなく、その間に意義の転化のあるのを意味するのだと言はれ、その一例としてあげられた「ばし」について、

これは元来、下にいふ「をば」の下に「し」の添はれるものなるが、「を」の省かれて、「ばし」の一語となれるものなり。そのはじめは、「をば」の意の強きものなりしこと、心もしらぬ人を宿し奉りて、かまばしもひきぬかれなば、いかにすべきぞ。

(更科日記)

の如く用ゐられたり。然るに、慣用久しき間に、もとの「をば」の意はなくなりて、たゞ「ば」の意の強きものの如くに考へらるるに至りて、次の如き用例を生ぜり。

「弓ばし引くな、間近く寄よ」とぞ下知せられる

(梅松論)

庭ふかき池に生ふてふみくりなは、くるとは人に、語りばしすな

(新撰六帖)

判官兄弟何れも無恙してばし帰り参りて候はば如何に、今一人うたてしきも無遣方候べきに

(太平記、十八、瓜生判官老母事)

下人に使はるるいはればしあるか

(謡曲鳥追船)

引用甚だ長きに失し、先学の学恩を蒙ることあまりに多きに過ぎ、恐縮至極であるが、今少し隠忍が許されるならば、土井忠生博士の近古の国語(學語科)には、前記更科日記の用例について

「かまはしも」を「釜ばしも」とよんで、「ばし」の文獻に現れた最初とせられてゐる。「ばし」は、「をばしも」の省略形と見られるけれども、更級日記の場合は、「はし」

と解する説が穩当であらう(宮田和一郎氏更級日記評釈三二頁)。「ばし」は、「をば」から出てゐる為に、延慶本平家物語でも、大部分は目的語についてゐるが、「ばし」は既に格を示すのではなく、修飾添意の助詞となつてゐるので、目的格以外にもついた。然し、これが用ゐられる場合は、限られてゐて、先づ

第一に疑問推量を表す句中に用ゐる、

小督がユクヘバシヤ知タル(延慶本平家、二本)

身バシ投ニ出ニケルヤラム(同 六末)

網をばし引くか(謡曲、藍染川)

何とした次第でばしどざるぞ(天草本伊曾保)

などといつた。

次には、禁止を表す句中に用ゐて、

无礼バシ仕ルナ(延慶本平家 五本)

かやうに申すとばし思ひ給ふな(曾我物語)

文王を釣タヤウニバシアルナ(中華若木詩抄、中)

御心にばし違ふな(天草本平家、一)

などと言つた。

その外、

闕所バシモアラバ(沙石集 三)

志ヲバシ得ラレタラバ(史記抄、四)

など、仮設の条件を示す句中に用ゐた例が稀にあるが、第一の用法から派生したものである。

「ばし」については、なほ小林好日博士の日本文法史にもかなり詳しい説明もあるが、それまでに及ぶまいから省略しよう。

ともかく前記山田、土井両博士の解説引例によつて見ても「これはし十人の子」の「はし」を「ばし」と考へることは妥当でないと思ふ。

次に、然らば、謂はゆる間投助詞の「し」が、「は」の下にくく用例があるであらうか。手近の広辞苑などを見ても全く見当らないのはもちろん、山田博士の平安朝文法史、日本文法論、日本文法学概論、平家物語の語法、松尾捨治郎博士の国語法論攷等、「し」については、大なる紙面を割き、詳細な論考を展開してをられるけれども、「はし」と続けた例などは一向に挙げてをられぬ。吉沢先生、木之下正雄氏の対校源氏物語用語索引などにも出てゐない。

かういふ穿鑿になると、大鏡述作に至るまでの一切の文献を片端から探索しなければ、確かに、ある、ないを決定することは出来なないかも知れない。筆者には今、それに堪へうる時間もなければ、エネルギーもない。しかしさう堅苦しく考へないでも、おほよその見当はつきさうなものである。前記權威的諸著にその記載がないのは、ゆめゆめ著者の粗漏などではなく、そのやうな言語現象が無かつたからであると推定せられる。もし一つでも確実な用例が見つかれば、筆者の早合点が直下に笑殺せられ、こんな愚稿は、寸刻にして破棄せらるべきである。

かりにこの推定が無稽でないとすれば、

「これはし十たりの子」

といふ読み方乃至解釈は、少くとも二個の私意を加へたことになるであらう。

その一は、古写諸本群の悉く一致する「四十たり」を、勝手に

「し十人」と改めたこと。

その二は、実際にありもしないと推定せられる「はし」と続けた語法を、人造的につくりあげたことである。

思ふに、これは「四十たり」の「たり」を、三人四人などいふ人を数へるに用ゐる接尾語の「人」と考へ、四十人の子としては直前の「子を十人までうみて」といふ語句にも整合せず、また一腹に四十人とはいかになんでも荒唐無稽すぎると考へたかなんかして、「これはし十人」と、一往辻褄を合はせたのであらう。

そこで今、「四十たりの子」の文字を古写本のままにしておき、勝手な用語などを製造せず、やすらかに解釈する方法はあるまいかとかれこれ思ひを馳せてみる。

その手がかりとなるものは、短観抄である。すでに引用したやうに「四十足の子なり、今も俗に嫌ふ四十二のふたつ子なり。これは父の年の四十歳と、子の二歳と合すれば四二となる故に忌（ム）なるべし」といふ解説である。そして「四十二の二つ子」とは、村田了阿の俚言集覧に、

四十二の二児俗に四十一歳の時に産る子、翌年二歳なるを四十二の二ツ児と云て、仮に棄て他人に拾ひとらせ、取てぞどつる也。四二の音、死字の訓に通へるを忌てなり。

（本朝俚諺）

増（安齋隨筆）云、民間の俗に、四十二の二つ子ハ親を倒すとて、父四十二歳の年其子二歳になるをば、我氏を名のらせず他の氏を名のらせ、氏もなきものは他人の子分にして、それにて心やすしといへり。是又、かの膏藥の類、何としてまぎらかすとても、血脉の続は絶る事なきを、氏を



違へ他人の子とよぶ事愚也。父の四十二に子の二つを合せ  
四四と重なるを、死せりとなして忌也。かかる物いまひは  
女はさもありなん、男は心の程しられて浅まし。(増補本  
による)

と愚夫の迷信を叱りつけてゐる。

その愚はともあれ、厄年の迷信は、もと陰陽家の言ふところ  
で、古く弘法大師の性霊集に、弘仁天皇の御厄を祈誓する表が見  
え、源氏、うつぼの諸書にも散見し、手近の広文庫、古事類苑の  
類にも、さまざまの説やおびただしい事例が挙げてあり、また民  
俗学辞典にも、厄年の義についての解説があるから、詳細はそれ  
らの諸著に譲つておく。

厄年の数、ことに男女の性別によるそれには、歴史的にも地理  
的にも差異があり、ことにその民間伝承による地域差については  
倉田一郎氏の調査表(厄年の問題民間  
伝承第九卷一号)が詳しいから、今は省略に  
附するが、後年女の三十三歳と男の四十二歳は、就中大厄として  
これを忌むばかりでなく、その前年後年までも前厄後厄と称して  
慎んだことは、少くとも民間伝承では通念をなしてゐるやうであ  
る。(尤も眞俗仙事編の書入には「二十五、四十二歳ヲ厄年トス  
ル事、内外ノ書ニ出処ナシ」とあるが、これは仏儒方面に  
ついていふか。やや後のものながら、満濟准后日記に、永享七  
年正月廿三日將軍(足利義教)御重厄御祈りのことが出てゐるが  
この時義教は四十二歳であり、親長卿記に当年(文明十五年)御  
重厄云々とあるのは、後土御門天皇の四十二歳の厄年をさしてゐ  
る。)

さて「四十二の二つ子」であるがためには、数へ年にすれば、  
四十一歳の前厄の子、満とすれば、四十歳の子であるはずであり

(但し大鏡当時、そのやうな計算法があつたか否かは未勘)、従  
つて四十歳の子は「厄子」と称せられても差支あるまい。綜合日  
本民俗語彙によれば、

○厄子 ○滋賀県高島郡では、厄年に生れた子には、「他人」

とか「おるす」というやうな名をつける。(旅伝六ノ七)

○福岡県大島でも、女二十五歳で男子、男二十五歳で女子が  
生れると、その子は位が高いといつて、これを箕の中に入れ  
て川か海に流し、他家の人に拾つてもらふ(同上)

○長野県諏訪地方では、両親のいずれかが厄年の場合、すな  
わち男二十五、四十二歳、女十九、三十三歳のときに生れた  
子を厄子といい、箕に入れて道祖神の前か四辻に棄てる眞似  
をする。また橋の下を鹽に入れて流すこともある。子供の育  
たぬ家でも同じことをするという(同上)

○対馬の厳原附近でも、母三十三歳のときの女子、父が四十  
二歳のときの男子を厄子といい、非常に忌む。人にくれたり  
棄てる形式をとる(民伝一〇ノ二)

○千葉県安房郡富崎村(館山市)でも、箕の中に入れて棄て  
る眞似をする。ヒライオヤには後々まで附合う(沿海手帖)

○厄親 ○長野県南北両安曇郡で、父母の厄年に生れた子は、  
二歳または七歳のとき他人を仮親として設ける。オヤトリと  
もいうが、男は女親、女は男親がつれて厄親のところへいく。

厄親から着物を貰うという(民伝九ノ二)

なほこれらについては、柳田国男氏の産育習俗語彙、族制語彙  
(親子なりの条)等を参照せられたい。

このやうな庶民の間の習俗は、むろん厄年の難を払ひ、その子

の福祉を希求する親の愛情から出た呪術で、自己の愛児を他人扱ひにし、擬装的な棄て児にして、災厄から擁護しようとしたものである。

さて最後にふたたび「タリ」の問題に立ちかへつてみる。綜合日本民俗語彙「タリ」の項に、

○タリ 東北地方では一般に、人の名にタリとつける所がある。岩手県和賀郡黒沢尻（北上市）では、四十二の二つ子につける名で、他人の意という。青森県上北郡野辺地地方などでは、厄年に生れた男の子には多利などの名をつける（方言集）  
藤原鎌足などの足も同じで、太郎の流行などと同じく、足の流行つた時代があつたのかもしれない。

とあるのが、一の拠点となりさうである。即ち、ここに、「一般に、人の名前にタリといふ名をつける。そしてタリは、他人といふ意味だ」と言ふのは、「タリ即ち他人で、異語同義、音韻の上からも類似する」などと言はうとするのではなく、四十二の二つ子を他人と見做すために「他人の意」とは説明するけれど、タリの語そのものが、直ちに他人なのではなく、タリの語は、別に考へる必要があるのではあるまいか。ことに「多利」などといふめでたい字面を用ゐるなども注目値することである。鎌足の足などはともかく、次に引用するごとき、多くのタリは、満ち足る意の足りで、謂はゆる寿言であることを思ふべきである。

栗田寛の古人名称考（栗田先生 雑著 卷九）に、「祥瑞年寿称賛によれる」ものとして列挙する、

- ・伊福部五百足（続後紀二）
- ・穂積臣百足（天武紀）
- ・穂積朝臣多里（統紀十七）
- ・五十日足彦命（垂仁紀）

・丹波史千足（統紀五）

・額田首千足（統紀八）

・多治比真人八千足（後紀五）

・奈貴首百足（東大寺文書）

・阿曇宿禰大足（統紀十六）

・阿刀宿禰大足（統後紀四）

・阿刀宿禰眞足（統紀三十一）

・赤染造広足（統紀十七）

なども、語そのものは、満足の足、祝福の意で、他人の意でないことは論ずるまでもあるまいと考へる。大日本史の人名索引などを見ても、同様の推論に達するであらうし、（必ずしもそれらすべてが厄子であつたと言はうとするのではない）、およそ人名にヨゴトを選ぶことは、古今人の親たるものの常情といつてよい。ことに忌むべき厄子であれば、一そう美名を与へて言霊の威力にすがらねばならなかつた。

伴信友の鎮魂伝に、鎮魂歌の後にある、

ナナヤ、ヨコノタリ  
七、八、九、十

の「十」を「タリ」と訓じてゐるのを説明して、

「タリは、生魂足魂、生日足日などの「タリ」にて、よろづの物の満足をいふ言なり」

といひ、万葉二の

オホキミ、ミイノチハナガク、アマタラシタリ  
「大王乃、御寿者長久、天、足、有、

とよみ給へる足シと同意の足にて（源氏物語の巻にやうやうに御）

一より九まで唱へて十と終べき處を、タリといへるにて、

御寿命を足しめ奉る由の祝辭なるべし。」

といつてゐるなど思ひ合すべきである。（ただし、足ラスのスは、

は、満ちて入ら  
つしやるの意。）

東条操氏の分類方言辞典によると、淡路島では、四十二の厄年

にうまれた子を、「いわいご」といふ由、「いはふ」は、もと「斎はふ」、「忌はふ」で、転じて祝賀の意になつたものとすれば、最初忌みきらふべき子の意の「厄子」から、それゆゑに祝福してやるべき意の子にも通じる「いはひ子」といふ名称は、「足り」の語義を説明するかけ橋の役目を果すであらう。

以上、まことにくだくだしい説明であつたが、「四十たりの子」は、「四十足の子」で、「四十の厄子」、それは、事實上「四十の二つ児」、即ち、父が四十の歳に産まれた厄子であり、それゆゑにまた、他人扱ひにせられて売られもし、前途を予祝して「足り」ともいはれたのではあるまいかと思ふのである。

— 本学教授 —